
Phalaenopsis orchid

恋夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Phalaenopsis orchid

【Nコード】

N1194S

【作者名】

恋夢

【あらすじ】

当店では、多種の物語を用意しております。豊富な種類の中から、貴方が気になったものをのぞいてみてください。浅くもないけど深くもない、だけど呼んだら気分爽快、そんな物語が、貴方を待っているはずです。

活字屋胡蝶蘭

何もかもが上手くないかない。

歯車が止まっている気がする。

私は……一体何をしたいのだろう。

こぼれ落ちるため息。

とどまることのない不安。

そんなものを抱えて、私は一体何をしたいのだろうか。

「いらっしやいませ、お客様」

「ッ!？」

いきなり声をかけられて、飛び上がってしまう私。

そんな私を見て、声をかけた人物はけらけらと笑った。
し、失礼な……!

「お客様、お疲れでございますね」

「…別に。疲れてなんかいないわ」

私に声をかけたのは、目の前の店の店員らしい。

エプロンを付けて、竹箒で掃除をしている。

今どき竹箒なんて…変なお店。

だいたい、何を売っているのかしら。

「いいえ、疲れていらっしやいます。私には分かります」

柔らかくほほえむその人は、性別不明。

男と言っても女と言っても通用しそうだ。

そして美形。

中性的な美人というやつだろう。

鼻筋は高く、目は細い。

笑顔を絶やさないというようなそのオーラが、私はとても苦手だった。

「アンタに、私の何が分かるっていうのよ」

ぼそっと呟いたはずの言葉は、律儀に店員の耳に届いたらしい。怒られるかな、と思って、ぎゅっと目を瞑る。

でも、私が思い描いたような言葉はこなかった。

代わりに、店員は、細い目を更に細めてこう言った。

「全てが。貴方の全てが分かります。何故なら…、」

そこでいったん言葉を切って、店員は、空を見上げた。つられて私も空を見上げる。

ああ。

空が青い。

雲が白い。

「ここは、活字屋胡蝶蘭なのですから」

活字屋胡蝶蘭。

そこでは、たくさんの物語が、貴方を待っています。

「ちょっと、寄り道していきませんか？」

「……ちょっと、だけなら」

ふんわりとほほえむ店員。

「Phalaenopsis orchid」

「……え？」

Phalaenopsis orchid

さあ、貴方も。

気になる物語を。

のぞいてみてはいかがですか？

死ニ神ノkiss (前書き)

甘い甘い世界へ、ご招待します。

死ニ神ノkiss

『殺せ、殺せ』

『逝け、逝け』

『死ね、死ね』

「さて、どのような死に方が好みかな？」

神様、どうか嘘だと言ってください。

「な……何なの、コレ」

タカハシフミノ
高橋文乃十八歳。

生まれて初めて、“死に神”というものを見ました。



非科学的なモノは信じていなかった。

だって、幽霊とか吸血鬼とか、居る訳ないじゃない。
今でも居ないと思っている。

でも、それなら私の目の前に居るこいつ等は何なの???

「…つまり、貴方達は死に神？」

『殺せ、殺せ』

『逝け、逝け』

『死ね、死ね』

「そういうこと。君は物わかりがいいんだね」

目の前に立つ、真っ黒い男。

と言っても、肌が黒い訳ではない。

むしろ肌は白い。

服が黒いし、髪の毛も黒くて、そしてオーラも黒いからそんな印象になるのだと思う。

「物わかりがいいも何も、ここで理解しないと何も始まらないでしょうが」

「ハハッ、そうだね」

『殺せ、殺せ』

『逝け、逝け』

『死ね、死ね』

…うるさい。

男の後ろからヒョコヒョコと飛び出ている黒い影。

その黒い影も一応死に神らしいけど……さっきから、殺せ逝け死ねという言葉しか喋ってねえ。

もしや、その言葉しか話せない…とか!?

「本題に移るわよ。どうして、私が死ななくてはならないの?」

「余命があと一日だから」

「でも、私はぴんぴんしているわ。死ぬ理由なんてどこにもない」

「事故死なんだ。明日君は、事故で死ぬ。交通事故だ。車が君を轢き逃げする。そして君は、辛く苦しい思いをしなければならぬ。手術とか、ね」

考えるだけでゾッとする。

この男の言っていることを信じていいのかも分からないけれど、

もし本当だとしたら……そんな運命は嫌だ。

「……それで？」

「君も、死ぬ前に辛い思いはしたくないだろう？ どうせ死ぬのに」

「……そうね、確かに」

ついさっきまでは、自分は寿命でポツクリ逝くのだろうと思っていたのに。

これだから世の中はおもしろい……のかしらね。

「僕達死に神は、そういう人達を助けるために存在している。助けると言っても、殺すことに変わりはないけどね。好きな死に方で殺してあげる、という訳だ」

「ふーん」

「分かったかい？ それならば、どんな死に方が好みか、このパンフレットから選ん……」

「悪いけど、お断りするわ」

ピシッと固まる男。

ああ、これだから男って嫌なのよ。

物わかりが悪いのね。

「……な、ぜ？」

「私は運命に逆らわない。逆らってまでして何が起るっていうの？ 貴方の言葉を借りれば、結局は“どうせ死ぬ”んでしょう？」

「でもっ、」

「この世にもあの世にも、楽な死に方なんてないのよ」

ぱっさり切り捨てる。

きまった！

内心ガッツポーズをしていると、急に笑い声が聞こえてきた。
どうやら、男が笑っているらしい。

「ツハハハハ！なるほどね…そういう考え方もありだな」

何それ。

馬鹿にされてるみたいで嫌なんですけど。

そう思って男を睨めば、何故か熱い視線を送られた。

そういえばコイツ美形だな。

「君、名前は？」

「何で貴方に言わなくてはならないのよ」

「ふっ。それではこうしよう。僕が名前を教えるから、君も教えて。君だけ教えないなんてズルイことはしてはいけないよ」

「何だその強制自己紹介。」

そう思ったけど、取り敢えずは頷いておいた。

相手を怒らせて殺されたらたまらないもんね。

「僕はアーノルドⅡエマシユタインだ。職業は死に神。自分で言うのも何だけど美の集合体と言っても過言ではないだろうね」

うっわ、ナルシストか、最悪！

心の中で散々悪態をついてから、私は自己紹介をした。

「私は高橋文乃。貴方達の場合で言うならば、フミノⅡタカハシになるのかしら？職業は学生。自分で言うのも何だけど平凡且つ普通な人生を送ってきたわ。…これまでは、ね」

皮肉をこめてそう言うと、男：いや、アーノルドⅡエマシユタインにはやりと笑った。

……うひょっ、鳥肌がたったぞ今。

背筋がゾクゾクする。

「よろしく、文乃。僕の場合はノルドとでも呼んでくれ」

「ノルドよろしく。で、帰ってくれない？これ以上私に用はないでしょう？」

「うんそうだね。でも、僕達死に神は、人が死ぬところを見届けなければならぬから」

……それって…。

「それって…凄く嫌ね」

「……え？」

「人が死ぬ場面を何回も見ると耐えられないわ。辛くて苦しくて、こっちが死んでしまいそうよ」

目が点になっているノルド。

どうしたの？

「そ…っか。今まで僕が味わってきた気持ちは…悲しみだったのか」「気づかなかったの？」

「ああ。ずっと…死に神は、人を殺して喜ぶものだど、教えられてきたから。だから、僕は人を殺したときに感じる胸の痛みを、喜びだと思っていた」

馬鹿だ。

とんでもなく馬鹿だ。

でも、その馬鹿さは環境からのもの。

ノルドが悪い訳じゃない。
だから、私は。

「気づいて、よかったね」
「……ああ」

精一杯、ノルドを励ましてあげるわ。
単なるお節介にすぎないけど。



「で、ノルド」
「ん？」

「いい加減、部屋から出て行ってくれないかしら」
「それは無理だよ。何故なら、僕は君が死ぬのを見届けなければなら
ないから」

「……あっそ。好きにして」
「うん」

言われなくても、というふうには、私のベッドに腰掛けるノルド。
アンタねえ……っ。

仮にも若い女と男が部屋に二人きりって……やめなさいよ！
とは、さすがに言えない。

「ねえ文乃」
「え？」

「死ぬことが、怖くないの？」
「……」

死ぬことが怖くない、そういうえば嘘になるだろう。

内心は恐怖でいっぱいだし、信じたくない。だけどさ。

「怖いよ、怖い。でも、怖がって、『きゃー』なんて言っても、未来は変わらないんでしょう？それなら、私は、残された時間をのんびりと、過ご…ッ、」

途中で涙が出てきた。

止まらない。

涙の止め方なんて知らない。

だって、今まで、一度たりとも泣いたことがなかったから。

私は…、死ぬことが…、怖い、よお…っ。

止められない涙をぼろぼろと流していると、私の顔に何かが当たった。

っていうか…、何かに覆われている？

顔を少し上げて、その“何か”を見ると、そこには、ノルドが居た。

「ノルド…ド…?…?」

「ごめん。怖いよな、うん。ごめん。変なこと聞いちゃって」

ごめんな、と、耳元で謝罪を繰り返すノルド。

何となく耳がこしょばゆい。

でも、なんだか嫌じゃなかった。

「うっ…つく、ん…」

一生懸命涙をこらえるも、嗚咽が漏れる。

そんな私を、ノルドはしっかりと胸に抱いていた。

「泣けばいい。枯れる程に涙を流せばいい。文乃に明日は来ないけれど、その明日は僕が繋いでみせる。だから今は泣いてくれ。僕の胸の中で。僕が明日を繋ぐために。君のためじゃない。僕のためだ。君は、僕のために泣くんだ」

無茶苦茶な理論。

それなのに、涙が溢れて止まらなかった。

泣くことがこんなにも楽だったなんて。

知らなかった。

「ノルドお、」

「なんだい？」

「…私を、殺して」

「……」

お願いだから、と、私はかすれた声で呟いた。

貴方に殺して欲しいの。

これが最後ならば。

「無理、だっ」

「どおして？死に神は、死に方を選ばせてくれるんじゃないの？」

「そうだ…そうだが…でもっ！」

「で…でもないでしょう!？」

何で。

何でよ。

私が死ぬのを止めないでよ。

もっと生きたくなっちゃうじゃない。

もっと、貴方と一緒に居たいって思っちゃうじゃない。

もっと…、貴方を好きになっちゃうじゃない。

貴方と話した時間はほんの少し。
だけど、恋に落ちてしまった。
それが分かるだけに悔しい。

貴方が、憎い。

「殺してよ！私を、殺してよ！それで、貴方は罪を背負えばいいのよ！私を殺した罪悪感と共にね！さあ、殺してッ」

言っている途中で、私は座り込んでしまった。

…私は、何ということを行っているのだろう。

ノルドに罪を負わせるなんて。

好きな人に罪を負わせるなんて。

「……文乃…、」

「ごめん、私今狂ってるから。気にしないでいいよ」

「でも、」

「忘れていいから。どうせ、ノルドにとっては、私なんてそのうち死ぬ人間の一人だろうけど」

やっかみ半分にそう言うと、ノルドは目をつり上げた。

な…何なのよ、一体。

「僕は、文乃のことを“そのうち死ぬ人間の一人”なんて思っ
てない」

「じゃあ、何だって言うのよ。私のこと、どう思ってるのよ!？」

ついカッとなって言うてしまう。

そして後悔。

ああ。

これで終わりね。

ノルドもきつと、私に愛想をつかしてしまうだろう。

ところが。

ノルドは、何故か、私にキスをした。

「ッ、！？」

声が出ない。

触れるだけのキス。

それなのに、どうしてこんなにも甘いのか？

私の唇に落ちたノルドの唇。

それは、冷たく甘いもの。

背筋に寒気がたつ。

それなのに、とても甘い。

もっと欲しい。

もっと私に、貴方をちょうだい。

「僕は、文乃を殺したくない。死なせたたくない。だって、その…、つまり…、」

「…、」

目線を泳がせながら言うノルド。

言葉が止まる。

私はノルドを見上げ、ノルドは私を見つめた。

「…、文乃が、好きだから」

これは夢？

それとも現実？

…分からない。

もう、何が何だか分からないわ。

「私も、好きよ」

分からない、だからこそ、言いたいことは言ってしまう。
後悔を残してはならない。

「僕の初恋だ。文乃は、僕の初恋の人」

「ノルドは、私の最愛の人」

「悪魔のキスは、人を殺すと言われている」

え？

いきなり、甘い雰囲気agaraと変わる。

不思議に思ってノルドを見つめると、さっと目をそらされた。

「…そして、死に神のキスは、人を来世へ飛ばすと言われているんだ」

「らい、せ…？」

ということは。

私は。

来世に…？

「ただし…、死に神は、キスをする…、消えるんだ」

「……はい…？」

「消える。人間界で言うと、死ぬのと同じ…」

「ばっ…!!」

馬鹿…!

私が来世へ飛んでも、ノルドが死んだら意味ないじゃん！
私はもう…、貴方なしでは生きられない程になっているのに！

「ごめんね、文乃」

「ごめんで済むわけないでしょ！？馬鹿じゃないの！？私…私、ノルドが居ないと…ッ、」

目頭が熱くなる。

ああーっもう！

何だって言うのよ、本当に。

「…もし、」

「え？」

「もし、僕と文乃が出会ったことが、運命だとしたら」

「運命だと…したら？」

ノルドの真剣な瞳。

その瞳の中に私が居る。

「きっと、来世でも、僕達は出会えるはずだ」

…!

本当？本当なの？

そう問いつめようとした瞬間、ノルドは消えた。

あっという間に。

いや、あっという間もなかった。

漫画や小説では、こんなときに、最後のお別れをさせてくれるの

に。

ところが、そんなことを考えていた私までもが、だんだん消え始めていた。

ゆっくりと、影が薄くなっている。

「ノルド。また、来世で会いましょう」

既にここには居ないノルドに別れを告げ、私は瞳を閉じた。



「ねえさん！ねえさん！」

誰かが私を呼んでいる。

まだ舌足らずな声で。

「ん…うう、なあに、ユーラス」

ほわあっと欠伸をしながら、私はむくりと起きあがった。

変な夢を見たわ…。

私の名前が、「タカハシフミノ」になっていて、死に神のノルドさんとキスをして、それから…。

…あれ？

それから、どうなったんだっけ？？

「ねえさん、いつまで寝てるんだよお」

「ごめんごめん。あらいけない、もうこんな時間だわ！」

「そうだよ、だから起こしてるんだろ」

「やーんっ！」

弟のユーラスの声を背中で聞きながら、私は部屋を出て行った。
…いや、正確には、扉を開けて、部屋を出ようとした、のだ。

「ぎゃいんっ!!」

「うわっ。ご、ごめん! 扉の向こう側に人が居るなんて知らなくて…」

「いったあ…。で、でも、だいじよぶです!!」

そう言って、私は顔を上げた。

すると、そこには…夢で見た、ノルドさんという人が居た。

「ノルド…さん??」

「え?…違いますよ。僕の名前は、サーノイドⅡエマシユタインです。よく、ノイドと呼ばれますが、ノルドとは呼ばれません」

そっ…か。

そうだよね。

いくらなんでも、夢と同じことがあるなんて。

「ごめんなさい、人違いでした」

「いえ、大丈夫です。…あれ。……貴方の名前は、フミノⅡタカハシですか?」

????

今度は私が面食らう番だった。
違う。

私の名前は、タカハシフミノじゃない。

その名前は、私の夢の中に出てきた女の子の名前。
なのに…、どうして貴方が知っているの?

そのとき私は、ふと、夢の中のノルドさんが言っていたことを思い出した。

——きっと、来世でも僕達は会えるはず——

そうだ。

確かに、ノルドさんはこう言った。

何故、今まで忘れていたのだろう。

私は、じっと目の前のノルドさん…ならぬ、ノイドさんを見つめた。

もしかすると、貴方が、私の運命のお相手かしら。
それならば……

「私の名前は——」

死に神のキスが、私をこの地に導いたのかもしれない。

f i n.

死ニ神ノkiss（後書き）

：フツ、どうだ、この初っぱなからシリアスをぶちかます作者の
空気読め無さ具合。

どうも、恋夢です。

改名前はゆながりかです。

短編集なので、一話完結だと思われます。

涙の湖 (前書き)

超・突発ですがorz
良ければどうぞ。

失恋モノです。

たくさん泣きたいときに、是非。

涙の湖

私はきつと、涙の湖で溺れることはできない

「ごめん。他に好きな人が出来たんだ、だから、」

「うん。分かった。分かったよ。貴方の好きにしていいいよ。…どうしよう？別れる？」

「……………ああ。…すまん」

人とは、勝手な生き物だ。

つい数週間前には、私を腕に抱き、愛の言葉なんぞをささやいていたくせに。

「いいの。気にしないで」

「…流依^{ルイ}、お前ってホント…いい女だよ」

「うん、知ってる。…なーんてね」

くすつと笑ってみせると、彼も引きつり笑いを浮かべた。

ああ。

きつと貴方は今、こう思ってるのよね。

そうか、流依と俺の関係は、遊びだったのか、と。

それもそうだわ。

私の態度がこれでは、愛を疑わずにはいられないわよね。

…でもね。

私、貴方のこと、本気で愛してるのよ。
好きなの。

今までで出会った人達の中で一番。
大好きなのよ。

これだけは、信じて欲しい…なんて言っても、信じてもらえる訳
ないわよね。

「…じゃあな、流依。…いつかまた、」

「また会おうなんて言わないでっ」

もう会いたくない。

って言ったら嘘になるけれど。

だけど、また出会ってしまったらきつとまた私は、貴方に恋をす
る。

落ちてゆくのが分かるのよ。

貴方にどんどん溺れていって

取り返しのつかないことになるのが。

「…そう、だよな。もう、俺の顔なんて見たくない、よな。…悪い」

「……うん、こっちこそ、ごめん」

「……じゃあ、今度はホントに…サヨウナラ」

その言葉がやけに虚しく響いた。

カタコトのサヨウナラ。

貴方はきつと、幸せになるのでしょうか。

そして私は、涙に暮れるのでしょうか。

彼が出て行った後で、ぽつりと落ちた涙一粒。
枯れる程に涙を流した。

だって、好きだから。

愛していたのだから。

貴方なしでは生きられないほどに、愛しているの。

涙の湖があると聞く。

その湖で、溺れてしまいたかった。

だけど、私は溺れられない。

だって、泳げるのだから。

だって、底があるのだから。

溺れていても、いつかは泳いでしまうのだ。

沈んでいても、いつかは底についてしまうのだ。

だから人は、強くなる。

だけどね、今はね。

涙の湖で、溺れさせて。

今だけは、彼を忘れられますように。

涙の湖は、どこにあるのかしらね

f i n .

モノクロファンタジスタ (前書き)

久々にシリアス。

この話は昔書いたものを再執筆させていただきました。

モノクロファンタジスタ

とうてい敵わないと思った。

「勇者様！」

「姫！」

勇者は魔王を倒し、旅の間ずっと思い続けていた姫とひしと抱き合った。

そんな光景を目の前にして、今さら。

今さら、勇者様のことが好きでしたなんて言えるはずがないのだ。

「おめでとうございます、勇者様」

「ああ。今までありがとう、魔法使い殿」

そう。

私はただの魔法使い。

旅の途中で勇者様ご一行に迎えられた、ただのしがない魔法使いに過ぎない。

きっと、永遠に主役にはなれないのだ。

「お幸せに、姫君」

「ありがとう、魔法使い様」

きっと、この勇者様ご一行の誰一人、私の名前を知らないに違いない。

今だって皆、私の名前を呼ぶ人はいない。

『魔法使い殿』『魔法使い様』『魔女さん』『魔女』

：誰が、こんなモブキャラの名前を知りたがるのかしら。
自分で考えて自分でむなしくなってきた。

「勇者様、姫君、そして皆さん。聞いてください」

とうてい敵わない。

この二人の間に、自分が割って入っていけるはずがない。
そんな隙間はどこにも見あたらない。

それならば。

「まず、私をお供にしてくださいましてありがとうございます、勇者様。私を温かく迎えてくれた皆様にも感謝を申し上げたいと思います。本当にありがとうございます」

「どうってことないよ。魔法使い殿が気にすることではない」

「そうだぜっ」

「あたくし達も貴方と過ごせて楽しかったですわ」

それならば、私は。

私にできるかぎりの祝福を、彼に捧げよう。

「そして姫君。勇者様と無事結ばれ、これから二人の愛でたくさん
の壁を乗り越えてくださることを心からお祈りしております」

「ありがとう、魔法使い様」

ふわりと微笑む姫君。

ああ。

勇者様がこの方に好かれるのも分かる。

だって、女の私でもくらりときてしまうようなほほえみだから。

「私は、私の魔法で、勇者様と姫君の祝福をお祝いしたいと思います」

さあ。

人生最大の大嘘をつけ。

好きだと言えないのならば。

その代わりに、お幸せにと大声で叫んでみせよ。

「二人の未来に、幸あれ!!!!」

口の中で呪文を呟く。

すると、空からひらひらと、桃色の花びらが舞い降りてきた。

勇者様と姫君が見つめ合い、そして抱き合う。

なんてハッピーエンド。

なんてバッドエンド。

とらえ方は貴方次第だけど、でも。

私はきつと、これで幸せなのよ。

さようなら、私の愛しい人。

ありがとう、私の愛しい人。

あなた達の未来が、どうか輝き続けますように。

f
i
n.

モノクロファンタジスタ (後書き)

題名に特に意味はありませんよ！

ちなみに、この後勇者様と姫君は結婚して、それから離婚します。で、魔法使いは永遠に生き続けることができるんですけど、それで勇者様が死んでしまった後に、魔王が復活するんです。

魔王が復活すると、誰かが魔王を退治しに行かなければなりません。

それで、魔法使いは、二度目の勇者にまた恋をしてまた失恋する。そんな超シリアスな物語を去年考えていました。

確かあのときの題名は、「永遠勇者物語」だったような…。

今も昔もネーミングセンスのなさは変わっていません(笑)

またいつか、魔法使いが、五度目の勇者に失恋して、その後魔王に告白されて無理矢理嫁にされるといいう裏話を書きたいと思っています！

T i m A n ! ! **(前書き)**

サブタイトルは、タイマン！って読みます。

途中を大文字にするのが好きです／／／

そして本当に英語でこう書くのかは知りません。

まあ別に合っても合ってなくてもこのタイトル気に入っているんですけど。

T i m A n ! !

「あのお、」

「ん？ あんだあ、てめえ？」

「斉藤先輩に、お話があるんですっ」

目の前でガンを飛ばしてくる斉藤先輩に向かってしゃべるのは、
極度の緊張を伴う。



「んで、俺に何の用？」

「実は、好きなんです」

「……馬路^{まじ}でか！？」

急に興奮したような表情になる先輩。

なんだなんだあ？

あたしは少し驚いて、三步程後ろに下がった。

「斉藤先輩はカッコいいしルックスも素敵だしカッコいいしカッコいいし運動神経も抜群でチョイ悪そうところがまた私のストライクゾーンのと真ん中な訳でして。まあ要するに全部好きです心も体もぐへへへへ。体をくださいとは言いませんってゆーか言える訳ないじゃんとりあえず心だけでも私にくださいなんつってー。あああん斉藤先輩への恋心を一言で表せなんてムリに決まってるじゃないあはどうしてくれるのよお：と、“あたしの友達が言っていました”」

「……は？」

「ま、通訳すると、貴方のことが好きです付き合ってください
ということですよ」

あの台詞を覚えるのには苦労した。
全く、あいつってば……。
借り一つだからな！

「…つまり、アンタは、友達サンの伝言を伝えに来たのか？」

「そういうことですね」

「アンタが俺に告白しにきたんじゃないかってか？」

「そういうことだと言っています」

「……あんだよ…っ、」

畜生、と低く呟く斉藤先輩。

何が畜生なんだ？？

ゆっくりと首をかしげるあたし。

そんなあたしの様子をちらっと見て、先輩は大きくため息をついた。

「俺はてっきり、アンタが…、」

「はい？あたしが何か？」

「……別にな」

ふいっとそっぽを向いてしまう先輩。

…さっぱり訳がわからん。

何が言いたいんだ、この人は。

この人こと斉藤涼太先輩さいとうりょうたは、我が校のボスだ。

髪を金髪に染め、ピアスをつけ、制服を着崩し、バイクに乗り…
要するに不良だ。

それに比べてあたしこと宇井由香^{ういゆか}は、平々凡々な一般市民。不良でもなく優等生でもない、通常の生徒だ。

で、あたしの友達が、恐ろしいことに斉藤先輩のことが好きと言
い出したのだ。

それがきっかけで、あたしは今ここに居る。

「斉藤先輩…、」

「あんだよお!？」

何故かいらだっている様子の斉藤先輩。

うーん、どうして怒ってるのかさっぱりわからん…。

まあでも、友達に、“絶対に告白成功させてやろうじゃん”と言
い張ってしまったのだから、なんとしてでも成功させなければ。

そう考え、あたしはキツと先輩を見据える。

少したじろぐ先輩。

よし、今だ……!!

「私と…、付き合ってくれないんですかあ？」

あの友達の声を思い出しながら、なるべく似せて言ってみる。

上目遣いで先輩を見上げると、先輩は、急に顔を真っ赤にした。
視線がきよろきよると泳いでいる。

「ああ、もちろん、こちらこ…って、違う違う、これはこいつじ
やなくて、こいつの友達で…いやいやだけどここに居るのはこい
つだ…けど、騙されるな俺…! ああでも畜生かわいいな馬鹿野郎。

っつか付き合いたい。付き合いたい。でもよりによって告白してきたのはこいつの友達かよ…。ああ馬路最悪。俺って運悪いー」

頭を抱えて、意味不明の言葉を呟き出す先輩。

……怖いんですけど。

あたしは、そんな先輩を横目に見ながら、こんなことを考えていた。

どうしたら、先輩は振り向いてくれるんだろうか……あたしの友達に。

「あっそうだ、先輩！」

「んああ？」

「あたしと先輩でタイマン張りましょう！！！」

「……はっ、？」

目が丸くなる先輩。

タイマン。

これってあれだね、不良さんの合い言葉だね。

「それで、勝った方の言うことを一つ聞く。いいですか？」

「……何でもいいのか？」

「はい！だから、あたしが勝ったら、あたしの友達と付き合ってください。ただし、」

「俺が勝ったら………お前が…俺と付き合え」

……うん？？

つきあう？

つきあえ？

どういう意味だっけ、これ。

頭の中が大混乱。

ちょ。

ちよちよちよ。

これって、あたしに向けられて言われてるの！？

あり得ないあり得ないあり得ない。

だって先輩はあたしの友達の好きな人で要するにあたしと先輩が付き合うっていうことは友達を裏切ることだってゆーか何でこんな事態に陥ったのよあたし！！？

どこでどう道を踏み違えた！？

「わかったか？ いいな？」

「……わっ、かりました……」

……そうよ。

勝てばいいじゃんか。

……うっしやあああかつてやろうじゃんかあああ！

女の意地というものを見せてやろう！

さあっ跪くが良い、先輩！！



「せんぱいいいいいい……おかしいっおかしいっどうしてあたしが先輩とおつきあいしなくちゃいけないんですかあああああ」

「それはお前が俺とのタイマンに負けたから」

「ひどいいいいいい先輩女の子に本気出すとかありえないいいいい！！最低！最悪！だいきらい！！」

「俺は好きだが」

「ぎゃあああああ何甘ったるいこと言ってるんですかきもいいいいい」

「…お前のその言いぐさは最低ではないのか」

「女子だからおっけーなんですよううううう」

タイマン。

それは自分と敵が、一対一でぶつかり合う、本気の喧嘩。

さて、あたしと先輩はどんなタイマンをしたんでしょうね…？

………そりやもうつつ、攻められまくりましたともおおおおお
おー！！

お母さんんんお嫁にいきませんんんん。

「大丈夫だ、俺が嫁にもらってやる」

「ふみゃあああああ人の心勝手に読むなあああプライバシー
の侵害いいいいいい」

さて。

これから一体どうなるんだろうね、あたしと先輩は。

まあ最後に一つだけ言っておくとするならば。

『男の子と本気でタイマンなんてやるもんじゃないね！！！！』

f i n .

T i m A n ! ! **(後書き)**

んーこいつら何となく好き…。

もしかしたらこれの続編とかつくるかもです。

まあ思いつきなんで、これ以上恥をさらしたくないから、書かないかもですけどね!!

はてさて、次の胡蝶蘭の更新はいつになるやら…。

ホントに気ままに更新していくので；

School on the sky in sea (前書き)

サブタイトルおかしな英語の羅列ですいません。

この短編は、小学校の頃書いていた小説の番外編なんです／＼／＼
そのうち本編の方も書き直せたらいいなあと思いますが：多分無理（）

School on the sky in sea

「げ、」

なんで。

どうして、こんなところに。

小柳が居るの??

「おや、ひらりんさんじゃないですか。奇遇ですねぇ」

奇遇ですねぇなんて言ってる場合じゃないのよ小柳。

私はこの海水浴場に来たことを、早くも後悔しはじめていた。



私と小柳の関係を一言で表すとするならば、「教師と生徒」だ。
これに付け加えるとするならば、「変態で助平でえろくて最低な
教師と優等生の生徒」である。
まあ要するに、私はこの小柳のことが大嫌いという訳だ。

「小柳、今日はどうしてここに？」

「泳ぎに来たに決まってるでしょう。ひらりんさんはおかしな人
ですねぇ」

アンタに言われたくないわい。

いらいらっとしながらも、私は愛想笑いで小柳に質問をする。

「それなら、小柳はどうして長袖のTシャツにジーンズを履いてるの？」

「それは、日焼けしないためですよ。ひらりんさんはお馬鹿ですね」

……こらえろ。

こらえろ私。

引きつり笑いをしながら、私は小柳を問いつめる。

「普通、泳ぐときは水着を着るんじゃないの？」

「そうですねえ、それもそうですねえ、当然でしょうねえ」

じゃあ何でてめえは水着を着てねえんだよ！

もう少しでそう叫んでしまいそうだったけど、ここは公共の場だ。はしたない言動はやめなければ。

「ひらりんさんは、水着なんですね」

「まあな。お前と違って、本気で泳ぎに来たからな」

「なるほどお。それにしても、ひらりんさんは童顔でちびでスタイルもいいという、男の人が放っておかないような人ですねえ、」

「どこ見てやがる変態教師めが！！」

うぜえ。

こいつ、ほんつとにうぜえ……！

いい加減腹が立ってきた。

こんなヤツ放っておいて、泳ぐぞ！

私はそう意気込んで、海に向かって歩き出す。

「ああ、ひらりんさん、」

「今度は何!？」

「水着に、セールの札がついてますよ」

……。

私は無言で、セールの札を水着からぶちぎる。

「小柳、ありが…とうつつ!!」

勢いをつけてセールの札を小柳に投げつける。

ってゆーか、気づいてたならそれをまず先に言えやコラァァ!!

私の投げつけた札が、小柳の顔面へとまっしぐらに飛んでいく。

き…決まった!!

ところが、小柳は顔の目の前で、ガシッと札をキャッチした。

「…おやおや、札が飛んできましたよ。今日の天気予報では、札が飛んでくるとは予報されていなかったのに、変ですねえ…」

「うぜえええええ!!!!」

出会った当初から、コイツとはそりが合わなかった。

私の名前、「たいらりん平林」という名前を、「ひらりん」と読み間違えてきたのがことの発端である。

小柳はどうやら、ひらりんという名前が気に入ったようで、あれからずっと私のことをそう呼び続けていた。

うっとおしいにも程がある。

「ひらりんさん、僕も一緒に泳ぎますよ」

「いいいいいいいいですう、ご遠慮しときますう、教師と生徒が一緒に遊ぶだなんて、は・れ・ん・ち★」

「他人にそう思われても仕方がないですねえ、だって僕はひらりんさんのことを愛してますから」

「き・も・い・ぞ♪」

我ながらあまつたるい声で小柳に釘を刺す。

小柳はいつも通りにへらにへらと笑っている。

：なんて気持ち悪いんだ：MかSかサッパリわからん：。

「さあ、ひらりんさん、僕と一緒に泳ぎましょう」

「てめえどの面下げて私の手え握ってんだよ放せ阿呆」

「おやおや、反抗期ですか」

「小柳には毎年反抗期だぞ気づかなかったのかやはり馬鹿だな」

いつの間にか繋がれていた手をものすごい速さで振り落とし、私は小柳から逃げ出した。

「おーい、ひらりんさんーん、」

「気色悪いから黙れ変態教師ー！」

おっしやあ、これでノビノビと泳ぐことができる！

そのとき、私は知らなかったのだ。

「あーあ。行っちゃった。ひらりんさん、可愛いから狙われちゃうのになあ」

小柳が、こんなことを呟いていたということ。



「んーっ、小柳ナシの海は綺麗だなー！」

ばしゃばしゃと豪快に泳ぐ私。

水面に波が立つ。

その波を乗り越えて泳ぎまくる。

ぐはーっ、やっぱり海っていいよな！

こう…なんつーか…、グツとくる！

この快感を求めて、バスでここまで来たかいたな。

まあ、一人というのはむなしいけれど。

ダチ誘う暇なかったんだよ、うん。

さて、そろそろ陸に上がるとすつか…。

泳いでいた手と足を休め、海底へと足をつける。

おおっと、案外深いな、ここ。

私がよろめいた、そのときだった。

嫌らしい声がしたのは。

「その可愛いお嬢さん、ぼくらと一緒にあそびまちなかあー？」

…何、この声。

そこらでつるんでいる女子よりも気持ち悪い声。

「あんだよ、てめえら」

「おおお、こあいこあい。ぼくちゃんたちはでちゅねー、お嬢さんと遊びたい青年でーちゅ」

げらげらと下品な笑い声をたてるヤツ。

その後ろには、体格のいい、いわゆるマツチヨなやつらがガードしていた。

……気持ち悪い。

背筋にゾクリと寒気が立つ。

「うっぎ。どっか行け、ナンパ男共」

「あつれくん？ぼくにそんな口聞いちゃっていいのー？あとで後悔しても知らないよお？」

…こいつ、酒飲んでるのか？

明らかに高校生くらいなのに。

年だって私と大して変わらないはず。

私が高校二年生だから、こいつらは…高校三年生くらいか。

…いや、留年したのかも。

「ナンパするならここじゃないどっかでやりな。残念ながら私は、あんた達にみじんほどの興味も抱いてないもんでね」

「ふふふ、いいねえ、そのドS魂。僕のM魂が萌えちゃうよくん」

きもい。

唇をキュッと噛み締める。

どうにかして…ここから逃げ出さないと。

そうじゃなきゃ、こいつらに何をされるかわかんねえ。

でも、真っ正面から逃げるにはあまりにリスクが大きすぎるし、右や左から逃げたとしても、あのマツチヨに捕まえられるのがオチだ。

どうすれば……。

そうこう考えているうちに、気づけばナンパ野郎が目の前に立つ

ていた。

思わず肩がすくむ。
すると、ナンパ野郎がにやにやと笑った。

「いいねえ、ぼくちゃん、S魂も燃えちゃいそうかもー」

「うっ…るせ、どっか行きやがれ!!」

「んー、嫌だ」

急に腕を掴まれる。

ヒッ……。

い、痛い…っ。

だけど、それよりも、怖い。

目に涙が溜まる。

それを見たナンパ野郎が、またにやにやと下品な笑みを浮かべた。

誰か……、誰でもいいから、たす、け…、

「小柳いいい!! 助けなさいよ、変態教師!!」

思わず口から飛び出たのは、あの変態の名前で。

私の声のボリュームに、ナンパ野郎共が一瞬ひるんで。

そして、その隙に、ナンパ野郎共の後ろに、とある影が忍び寄った。

「僕のひらりんさんをナンパするとは、いい度胸ですねえ」

長袖のTシャツを腰にくくりつけ、ジーンズで海を歩く変人、小柳。

そのおかしな姿に、ナンパ野郎共の目が点になった。

：どうして、小柳なんかの名前を呼んでしまったんだろうか。

平林、一生の不覚…。

「っは？お前、何なの？この僕に逆らうとかまじ意味わかんないんですけど」

うるせーナンパ野郎め。

どっか消え失せろ！

ってゆーかソレより前に、私の腕を離せ！

痛いっつーの！！

「なるほど、君は留年でもしたのかな？それで憂さ晴らしに、海へやてきて、手近な女の子を強姦しようとした、という訳か。只知道ってるかな？強姦は犯罪だよ？それに…、」

小柳がスツとマッチョ男の後ろに立つ。

そして、流れるような仕草で、鉄拳を震った。

「僕のひらりんさんに手を出すのは、強姦よりも更に酷いことだよねえ」

マッチョ男が派手な音を立てて海へと沈む。

それを見たナンパ野郎が、顔をサツと青くした。

他のマッチョ男も、次々に小柳に倒されていく。

気づけば、私の腕はナンパ野郎の手から解放されていた。

そして、最後に残ったのは、ナンパ野郎だけ。

小柳が、スッと目を細めてナンパ野郎を見つめる。

ナンパ野郎が、体をガタガタ震わせながら、後ずさる。

私が見つめる中、小柳は、海の中を歩いているとは到底思えないような速さで、ナンパ野郎に近づいていった。

おおお、こいつもぎったぎたのふるぼっこにするのか!?

私が少々どきどきしながら見つめると、小柳は、ナンパ野郎の顎をきゅっと持ち上げた。

……ん?

「:おや? 君は、桜路財閥のおぼっちゃんじゃないか?」

「な、何故それを:っ、」

「僕もそっちの世界に、少々ツテがあってねえ。……それより君、このことを君のお父様にばらしたら、どうなるかなあ?」

「それだけは:!! それだけは、やめ、ろ:っ、」

ナンパ野郎の態度が急に小さくなる。

それどころか、ぼたぼたと涙をこぼしはじめた。

「なるほどねえ、桜路のぼっちゃんが留年したとか桜路の跡継ぎはおちこぼれだとかいう噂は聞いていたけど、まさか本当だったとはねえ:」

「:っ、:」

「まあ、これ以上君をいたぶってもしょうがないか。君の怖がる顔は、ひらりんさんの顔と違って気持ち悪いしね」

:ちよ、それどういうことだよ。

私の怖がる顔はどんな顔だっつーの!?

「ひらりんさんに二度と手を出すな。それを約束するなら、君のお父様にはこのことを黙っておいてやる」

「……、わか、た」

「…さーて、ひらりんさん、行こうか」

パツとナンパ野郎の顎を放し、私の手をつかむ小柳。

…痛くない、よな。

手加減…してくれてるんだろうな、こいつも。



「ちよっ、小柳、手エ放せよ！」

陸に上がったところでわめく。

いつまでつかんでやがるこのド変態め！

「まったく、ひらりんさんは困った人ですねえ。助けてあげたのに、僕にかける声は罵声ですか」

「…悪かったな、迷惑かけて」

「そうですよ。心配しましたよ、僕の名前を呼ばずに他の男の名前を呼んだらどうしようって」

「そこかよ！お前やっぱり最低だな！っつか私の声聞いてたってことは、それより前にあの場に居たのかよ！さっさと助ける阿呆！」

「いやあー、ひらりんさんの可愛らしい声が聞きたかったもので」

「気色悪いこと言うんじゃないええ！」

…やっぱり、小柳は小柳だよな。

うん、“僕のひらりんさんをナンパするとは、いい度胸ですねえ”
っていうのは、その場しのぎの嘘だよな。

だって、教師と生徒だよ。

そんな過ちがあつていいはずがないしな。

一人で納得する私に、小柳がふっと笑いかける。

…な……なんだよ、一体。

「さてと、変な男も退治したことですし…僕の忠告を聞かずに、一人で海に飛び出していったお仕置きをしましょうか」

「ひっ…、」

「そそりますねえ、その声。誘ってます?」

「んな訳あるかっ!!馬鹿!!っつーか教師がんなことしていいのかよ!」

「今はプライベートなので」

「何真面目に答えてるんだ阿呆おおおお!!!!」

小柳。

てめえってヤツはホントに…ホントにホントに……っ、

変態だな!!!!!!

f i n ? ? ? ?

S c h o o l o n t h e s k y i n s e a (後書き)

こいつら好きなんですよ、私。

おもしろくてww

ってゆーかこんな物語を小学生時代に書いていた私って一体…。

あ、この物語の本編が見たい！って方居らしたら言ってくださいねー^^

喜んでうpしますよb

親方の悩み (前書き)

親方の悩み

ちたうま
散田宇摩十九歳、この年にして異世界とりっぷという貴重な体験をしております。

「おいウマコーっ、さっさと料理しやがれーっ」

「誰がウマコだ馬鹿野郎おっ、今日はてめえの料理当番の日だろーがあっ！」

「うっせーな、俺は疲れてんだよ、さっさと食いもん食わせろ阿呆っ」

「誰が阿呆だ誰が！」

乱暴な親方に引き取られて、居候をさせてもらっている宇摩です。

…ってあれ？

もうカメラ回ってるの！？

やっだー、もー、それを先に言ってよね！！

……ごっほん。

皆さんこんにちはー！

地球のアイドル宇摩ちゃんです、てへ！

この度は異世界さんにおじゃましてまーす、早く誰か助けに来いばかやろー、てへ！

「何をくだらんことを言っている、ウマコ。さっさと料理、」

「だあれえがあウマコですってえええ！？」

思えば小さい頃から、この名前のせいでさんざんからかわれてき

た。

うまうまうまうま、てめえらはそんなに馬が好きかと言いたいくらいにからかわれてきた。

そのせいで自分にコンプレックスが…って今はそんな話どうでもいいか。

「だってお前が名乗ったんだろ、ウマコって」

「違うわいっ！てめえが勝手に聞き間違いたんだろーがあ！」

私がこの世界に初めて訪れたとき、この親方への最初の挨拶がこれだ。

『はじめましてわたしのなまえはウマこんなやつですがどうぞよろしく』

…うん。

確かに、意図的に句読点を抜いた。

だって異世界に飛ばされるとか意味わかんなかったし。勘ねるのも仕方なくない？

それを、この親方は、

『よろしくな、ウマコ』

と。

…さすがに怒りを乗り越して悲しかったよ。

「ははは、仕方ねえ、気にすんな、ウマコ！」

「気にするっつーの！っていうかさ王子様に会わせろ親方の馬鹿ああ！！」

「おーじ？…あー…そんなことも言ってたっけかな…」

自己紹介が済んだ後、私は彼に確認をしたのだ。

『この世界に王子は居ますか？』

と。

その質問に、親方はこう答えた。

『居るとも。いつか会わせてやろう』

この誓い、しかと耳に聞き届けたぞよ!!

異世界とりっぷといえは、もちろん王子様が定番でしょう!

王子様と結婚すれば、どんな我が儘も言い放題…ふふふふ。

こんなちっぽけな領主の親分ごときでおさまっている宇摩様じゃなくってよ!!

「さあ、さあ、さあさあさあ!あの誓いを忘れたとは言わせないわよ、親方!私をさっさと王子に紹介しやがれー!」

「おい、おいおいおい、待てよ…。いくらなんでも気が早いだろ…。それに、何もあんな陰険な王子と結婚しなくたって…お前の近くにお前のことを好きな男とか…居るのに…、」

ねちねちとつまらんことを呟く親方。

その親方を見て、私は片方の口角だけをあげてあざ笑った。

「甘いわね、親方。玉の輿を目指さないで、何を目指すと言うのよ」

「……。…愛を大切にしたらどうだ?」

「アイ?そんなもの、私の辞書にはない!!」

「どんな欠陥品だよ」

ふふふふ。

見ていなさい親方。

私はいつか、王子様のお嫁さんになって、貴方を見下してやるわ。

「あははははは!ザマアみなさいってのよ、親方め!」

「おい、声に出てるぞ。…だあつ、お前鈍すぎんだよ、俺の気持ちに気づけ阿呆…っ。…この俺が嫁に迎えてやってもいいという熱意をだな、毎日こうしてお前に語っているのが何故伝わらないのだ…。女の口説き方が下手だからか？なんでだ？なんでだ？？」

「親方、何か言った？」

「いや、何も！？」

こうして、私の異世界らいふは、今日も問題なく過ぎていきます。

f i n .

親方の悩み (後書き)

突発小説です。

ただたんに、不器用な男と鈍感な女が書きたかっただけです (笑)
主人公思った以上に腹黒くなってしまいました；
これも愛嬌かな？ (笑)

先生、
「new!」
(前書き)

突発！。

先生、
「new！」

ぴーんぽーん。

間の抜けた音が部屋に響いた。

私はびっくりとして、立ち上がる。

——まさか。

だって、×切にはあと三日もある。

だから、このピンポンの音は、あの人じゃない。

おそろおそろ私は玄関に近づいていく。

「ど、どちら様ですか…？」

「俺です。吉沢よしざわです」

…ああ。

幻聴だと信じたい。

なんでなんで？

来るのが早いでしょ。

どうしてこんなに早くに来てるの？

まだ原稿出来てないのに。

「……セールスは、お断りです」

「ちよっと待ったあ！先生っ、居るのは分かってるんです、さっさとドア開けてください！今回はきっちり×切に間に合うように描き上げるって言ってたじゃないですか！」

「だって×切までにまだ時間あるじゃん！吉沢さん帰ってよおー！」

思わずわめくと、インターホンの前の吉沢さんの声が止まった。

「何、言ってるんですか、先生」

「え……？何、って……？」

「×切、明日ですよ」

……は——！？

息が止まる。

嘘だ。

嘘だ嘘だ嘘だ。

こんなの、現実じゃないんでしょう？

私は、震える手で、鍵を開けた。

すると、そこには、鬼のような顔をした吉沢さんが立っていた。

アーメン…。



現役高校生漫画家、と噂されるこの私、結城芹ゆいきせりは今、現実の壁に突き当たっている。

「はああ！？×切を間違えたあ？」

「すいませんっ。だって、吉沢さんが…」

「だって何もないでしょう！先生の原稿が出来なかったら、雑誌のページが埋まらないですよ！？ほら、さっさと描いてください！」

「でも、今から学校に行かないと、」

「んなこと言わずに描け——！」

ど、怒鳴らないでよおお！

吉沢さんこと私の担当の彼は、目をつり上げて叫んでいる。

無茶苦茶だー！

横暴だー！

っていうか遅刻しちゃうし……！！

「よ、よよ吉沢さんっ私取り敢えず学校いつてきます！」

「ちょ…、先生、待て！おいこら、止まれ！」

私よりも十歳くらい年上の彼が、立ち上がる私の手を掴もうとする。

現役高校生なめんなー！

吉沢さんの手が私に触れる直前で逃げ出す私。

電光石火のスピードで制服に着替える。

吉沢さんが見ている前だけど、恥ずかしい★なんて言ってられるかー……！！

「先生っ、俺の目の前で着替えしないでください、目のやり場に困る！」

「知るかつ、吉沢さんに着替え見られても嫁には行けます！」

ポニーテールにしていた髪をほどいて、素早く三つ編みをする。

くせ毛を誤魔化すのは三つ編みが一番！

誤魔化さないと歴史の先生に怒られてしまうのだ。

ストレートパーマかける金も時間もないし。

そして私は、仕上げにだて眼鏡をすちやりと装着した。

変装完了……！！

「その言いぐさは俺に対して失礼だ！先生は俺をなんだと思ってるんですか！？」

「うるさくて面倒くさい担当者」

「おいこら、先生待ちやがれ！！」

「いつてきまーすっっ」

少し昔の少女漫画のように、私はパンをくわえて家を飛び出した。



「せんせっ……、って、行っちゃまいやがった」

畜生、先生は逃げ足だけは速い。

僕は、ゆっくりとため息をついた。

それにしても、×切を間違えるなんて先生らしい。

なんというか、先生は……死抜きで漫画家になったお方だから。

何でも、先生の実家は両親がかなりお堅いらしく、高校生になったら自立しろと言われていたらしい。

自立と言われても、高校へは行きたかった先生は、興味のあった漫画を描きだして、死にものぐるいで新人賞に応募しまくり、そして漫画家への切符を掴んだというわけだ。

——ったく。

どうして僕は、こんな人を好きになってしまったんだろう。

狭い部屋に、男女が二人きり。

そんな部屋に居て、僕が何も考えずにいられると思っているのか。先生はとても不用心だ。

さっきだって、まるで僕が居ることを全く気にしていないような

そぶりで着替えていた。

……ああ。

思い出すだけで頭が痛い。

まだ成長途中であろうあの体に、少しでもくらりときた自分が憎い。

っていうかこれ、犯罪だろう自分。

「ああ……ホント、どーしよー俺……」

先生は、僕にまだ恋人が居ると思っている。

僕と彼女が別れたと伝えていないからだ。

誰のせいで別れたのか。

その理由はハッキリとしている。

もちろん、先生のためだ。

「犯罪者だ……俺、犯罪者だ……」

ヤバイ。

先生、どうしてくれるんですか。

どんどん、貴方に溺れていく。

三つ編みの貴方も、ポニーテールの貴方も、眼鏡の貴方も、全てが愛おしい。

「先生に、別れたことをどうやって伝えようか……」

目下最大の悩みはこれだ。

今年で二十五歳になる僕が、こんなことで悩むとは……。しかも、現役女子高校生のために。

僕が一つため息をつく。
すると、携帯からメールの着信音が鳴った。

「あれ、先生からだ。：『すいません、実はまだネームの段階です』
……!？」

：目下最大の悩み変更。

「先生ええええええ!!!!」

メールをスクロールさせると、最後にこんなものまでついていた。
『お弁当をつくるのを忘れたので、吉沢さん作ってください。あと
学校に持ってきてください』

……僕はきつと、一生この先生に振り回されるのだろう。

f i n .

先生、
「new!」(後書き)

これはもしかしたらもしかしたら続く…とか言って続かないよ絶
対↑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1194s/>

Phalaenopsis orchid

2011年10月9日18時27分発行